

想像界の生物相

メキシコ仮面に見るクリーチャーたち (1)

— 旧コードリー・コレクションより

ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長 アンソニー・シュルトン



資料名 | カイマン (ワニ) 仮面と衣装
 標本番号 | H0068130 ~ 31
 地域 | メキシコ
 サイズ | 仮面の高さ 93cm、衣装の長さ 232cm

資料名 | タランチュラ仮面
 標本番号 | H0068141
 地域 | メキシコ
 サイズ | 高さ 64cm

メキシコの仮面にはさまざまな物語があり、過去と現在が交わる不思議な世界への入り口となる。この世の創造前にいたという怪物がキリストと肩を並べたり、メキシコ軍とフランス軍の戦いにトルコ人が突如あらわれたりする。神話と歴史が攪拌され、融合することのような時間の流れの揺さぶりのことをわたしは「時震」とよんでいる。それは、カーニバル、復活祭、クリスマス、聖者祭、一年の農作業の始まりと終わりを祝う祭などのときに、年に何度か起こる。祭や儀礼の際におこなわれる仮面劇において「時震」を生み出す人びとの想像力は、ときにコレクターの収集欲やアート市場を満たすための仮面を創造することもある。

◆◆◆コードリーとみんなはく◆◆◆

みんなくには世界有数のメキシコ仮面コレクションがあるが、なかでも『メキシコの仮面』(一九八〇年)をしるした収集家ドナルド・コードリーのいくつかの旧蔵品にここで出会えたことは大きな収穫であった。例えば、人間とクモの要素を組み合わせたタランチュラ仮面。このような

合成獣はメキシコには非常に少なく、コードリーの本に掲載されている事例が確認されているのみである。コードリーはこれを、一九〇〇年ごろにゲレロ州のカンボ・モラド、もしくはラ・パロタ地域のバエナ家の仮面作家によって作られたものとしている。しかしその後の研究者の調査によって、この一連の仮面がゲレロ州ティクストラの仮面作り一家のエルネスト・アブライハムによって、一九七〇年代から八〇年代にかけて作られていたことがわかった。エルネストは、実際に儀礼で使われる仮面を彫るだけでなく、メステイーン(混血)の仲買人の依頼を受けて、祭とは関係のない、より空想的な作品も創作したことを打ち明けた。それらが、イグアラ、ケエルナバカ、メキシコシティといった都市部の市場から、仲買人が造りあげた「由緒」とともに海外のコレクターの手に渡ったのである。

◆◆◆アステカ神話の怪物◆◆◆

少し変わったワニを象ったカイマン仮面と腰に付ける衣装も同じくコードリーが集めたもので、二〇世紀初頭にサンタ・ア

ニタに住んでいた謎の仮面作家ホセ・ロドリゲス作とされた。この仮面が使われたとされる魚の踊り(または漁師の踊り)が本当にあったか疑わしいと一時期はいわれたが、メキシコ人研究者ルース・ルチュガがチャパで撮った写真には類似したワニのような生き物を腰に付けた踊り手が写っており、コスタ・チカの沿岸でも同様の踊りが報告されている。

ワニの尾は、蛇革とおぼしき連結部分でつながれたいくつかの木製パーツでできており、踊り手の腰の動きとともにうねうねと動き、近づくと容赦なくぶち当たるようになっていく。ワニはおそらくアステカ神話に登場する大地の怪物シバクトリをあらわしている。

アートとして扱うべきか、民族資料として扱うべきか。いずれにしても、メキシコの仮面作家たちの独創的な想像力と活発な創造力の産物であることには変わりない。彼らは自ら体験したさまざまな苦楽から、想像界と現実界、自然と超自然を混合した驚異の世界を抽出するのである。(翻訳・山中由里子)